

第七章 大正の混沌

一 内外事情

大正時代は、一世紀の六分の一にも満たない、極短い年代であった。それでも政治、経済を大きく揺り動かし、思想を曲げ、社会に強い衝撃を与えた。明治から昭和への掛け橋でありながら、それは一直線を描いてはいなかった。山脈を辿る往還のように、羊腸たる路線が、此の時代の地図を複雑にしていた。そして開花の時から、将来の波瀾を示唆するようないくつかの事件が起って来たが、その口火を切ったのが、大正元年十二月五日の政変で、第二次西園寺内閣の瓦解であった。

財政整理を立看板として組織されたこの内閣も軍の反対に遇って総辞職し、このあと桂太郎が大命を承けて第三次桂内閣を組織した。しかし、桂は組閣にあたって暗躍し、横暴と不明朗な点が多々あったので、「輿論は一時に勃発し、憲政擁護という新熟字の高唱は言論社会に潮のように起ってきた。」と「内閣更迭五十年史」の著者が言うほどであった。

而して此の「憲政擁護」の運動は、三田系の新聞記者、政治家、実業家の社交団体である交詢社から起った。彼らはこれが世論を喚起するために、憲政擁護会をつくり、(一)閥族政治の打倒、(二)憲政の擁護を旗印とし、一大国民

運動を展開した。一方議會でもアンチ桂の空氣が濃厚になった。桂首相は国会の内外に起きたこのアンチ桂運動に對して、漸く苦惱の様相を示したが、それでも強氣の彼は、組閣翌年の二月十日に至って三度目の議會停会を斷行し、この難局を切り抜けようとした。然し議事堂周辺にあつまつて、議會の成行を静觀していた群集は、此の処置を聞くや、いたく激昂し、喚声を挙げて警視庁、派出所、新聞社等に殺到して焼打をかけた。世にそれを焼打事件と云う。この報はいち早く、大阪、京都、神戸、広島等各地に伝わり、相ついで暴動が発生し、今や憲政擁護運動は、大衆的な政治運動となった。而して此の暴動は、ついに桂内閣を退陣させ、海軍大將山本權兵衛にバトンがうつされた。山本首相は税制改革と行政整理の二本を旗印にしてデビューしたが、前内閣のい、ち、とりとなった軍備と財政の問題は、この内閣でも重大な課題となった。當時の国情では此の兩者はつねに不即不離の關係にあった。或る時にはお互に助け合い、また或る時は互に背反した。つまり日本が他の列強と併進して行くためには、それに相應しい軍備が必要であるが、一面資本の弱さは軍事上の占領によつて補つて行かなければならなかった。そこに大きな矛盾があつた。そして大正時代に入ると、この矛盾解消のために一役を演じたのが、ブルジョアジーであつた。つまり彼らは軍備の諸問題を資本の統制下におかんとした。資本家が政治と經濟の両面から、わが國の歴史を左右する様相が、こゝに現われて來たのであつた。

このように政治が資本家の手に落ちると、已に政治家と資本家との間に醗酵されていた所謂「情意投合」「なれ合い」政治から、「利權」政治に發展し、政治は金に依つて左右されるという金權政治にまで転落して行つた。

こうした經濟情勢の変遷は、勿論政治の衰勢と不可欠である。即ち山本内閣の生命取りとなつたシーメンス事件

は、軍部、政商とが結託した汚職であり、これが導火線となり、国民の憤激をかって議會デモとなり、遂に内閣を投げ出すに至った。このあとを承けて立つた大隈重信に対する元老の課題は、(一)財政と軍備の調和、(二)政友会の打倒、(三)對華政策の樹立であつた。このうち第三の對華政策は、所謂、中国に対する二十一ヶ条の要求となつて現われ、將來中国人の間に排日感情を巻き起す原因となつた重要な課題であつた。今こゝではこれを詳述することを避け、第一次世界大戦を転機とする国内の經濟問題、社会問題、労働問題等に関し、庶民の權利が拡大された民主主義の勃興について一瞥を加えて見よう。

わが国の經濟は、第一次世界大戦の初め頃一時不況に陥つたが、欧州の諸国がその全力を挙げて戦争に没入した結果、わが国の外国貿易は異常な發展を遂げるにいたつた。新販路は海外の各地に及び、諸外国から物資の注文が殺到し、そのため会社工場等の増・新設が盛んになり、労働力は無限に要求され、農民は都會に進出して生産に従事した。然し労働者側から言えば、こうした傾向に対しつねにおくれ勝ちであつた。勿論賃金は漸次増加して行つたが、それよりも物価はこれに先行し、驚くべき速さで進行したから、労働者の生活は必ずしも満足すべき状態ではなかつた。

このような風潮は、民主主義や社会主義の發達と共に新しい思想団体や労働組合等を發生せしめたが、特に後者の勃興は大正期の社会問題、労働問題の大きな特徴として取り上げられた。そうして此の組合運動の口火を切つたのが、友愛会と称する団体であり、これを切っ掛けとして、大正元年以降同十年までに結成された組合数は次の通りであつた。

大正元年	二年	三年	四年	五年	六年	七年	八年	九年	十年
五	六	六	四	一三	一四	一一	七一	六六	七一

大正五年以後急速に労働組合がふえ、八年には前後十年間の結成数の約四分の一の二六・五五％に昇っている。その思想的背景となったものは、大正六年十一月に成就されたロシア革命と、所謂「米騒動」との二つであった。ロシア革命は無産階級の勝利を意味し、これがわが国の無産階級に大きな驚異を与え、次いで起きた、ドイツ、オーストリア、ハンガリー等の革命は全欧を揺がすばかりか将来わが国の社会運動にも転向を促すものとして急進的な知識階級や労働階級に強い影響を与えた。

大正三年第一次世界大戦が始まってから、わが国の物価は一路上昇の線をたどった。殊に生活必需品である米価は、年毎に暴騰を招いた。その結果ジャーナリズムが「米価の革命」と評した米騒動が起ったのである。所謂「越中女一揆」が発端となって、米商襲撃事件が相ついで起り、九月中旬までには一道三府三八県に波及し、参加者七〇万以上に及ぶ全国的な大騒動に拡大発展した。

此の間、大正四年十一月十日には大正天皇即位式が、京都の紫宸殿で行われ、翌年一月には大隈首相が暗殺事件（未遂）に遭遇するなどの騒ぎがあつて、遂に大隈内閣総辞職、寺内正毅内閣の出現となった。寺内内閣の在任期間凡そ二年間に公布された法律は、軍事救護法、鉄鉱業奨励法、暴利取締令、金銀輸出禁止、戦時利得税法、軍需工業動員法などで、当時の内外情勢を明らかに反映したもので、その点では功績を残したものと云えよう。而してこの内閣の跡を承けて内閣を組織したのは平民宰相原敬であり、在任期間三か年の間に国際状況が大変貌し、わが

国にとって重大な影響を持つものに、パリ平和会議への参加、尼港事件による陸軍のシベリヤ派遣等があった。然し大正十年十一月原首相が東京駅頭で暗殺されたため此の内閣も総辞職し、高橋是清が跡を追って組閣、これ以後大正の末期にかけて、海軍大将加藤友三郎、第二次山本権兵衛、清浦奎吾、第一次加藤高明、第二次同、第一次若槻礼次郎内閣と相ついで出現したが、いずれも短命で平均寿命八か月半であった。これは必ずしも内閣の最高責任者に人を得なかったためではなく、寧ろ内外の事情が余りにも逼迫し多事多難であったからである。即ち大きな事件を拾って見ても国外にあっては、蒙古人民革命政府の成立、エジプトの独立、東三省の独立宣言、ソビエツト社会主義共和国連邦の成立、排日移民法成立、中華全国総工会結成、広東国民政府樹立、蒋介石北伐宣言等、また国内にあっては、婦人参政権獲得同盟・日本農民組合・日本共産青年同盟結成、第一次共産党検挙、関東大震災、学生社会科学連合会・全国学生軍教反対同盟・農民労働党・全日本農民組合同盟・日本労働組合同盟等の結成等。

これを更に内容的に見ると、大正七年の第一次世界大戦終結と共に軍需工業は壊滅し、労働組合の行動に至が生じて来た。好景気時代にはその運動も積極的で、戦闘的であったのが、不景気の襲来と同時に工場の閉鎖等相ついで起って来る現実に対し、彼らの行動も勢い消極的になり、防衛的にならざるを得なかった。このような時その運動の指導原理として採り入れられたのが社会主義または共産主義理論であった。その良き例は、大正九年十二月十日、東京神田青年会館で開催された社会主義同盟の創立大会である。即ち此の同盟の発起人には急進知識階級と労働組合の幹部が顔を連ねていた。荒畑勝三、麻生久、赤松克麿、加藤一夫、加藤勘十、大庭柯公、小川未明、大杉栄、堺利彦、島中雄三、高島素之、高津正道、山川均、山崎今朝弥等の名前から推しても大体その傾向が察しられ

るであろう。尤もこれらのうちに見る組合の幹部は、組合の代表者ではなく、凡て個人の資格で参加したものであった。然し、このような社会主義的、或いは無政府主義的、または共產主義的思想は、当時の世界的傾向であつたから、わが国だけがこれから超然としているわけにはいかなかった。

二 丸善の商策

このような国内的思想動向から、そのもととなる書籍の購買状況を容易に察知することが出来るだろう。即ち一般には哲学、社会科学、経済学関係の書籍が読者の対象となり、それも大正の中期以前に活況を呈した。これは洋書を輸入していた丸善の仕入状況からでも判断することが出来る。

一体丸善がわが国の文化の進展に重要な役割を演じたのは、洋書の輸入・紹介に全力を傾倒したからであつたが、これに就いて当事者が採つた態度は大体次の五つに要約することが出来ると言えよう。

- 一、当時の思想傾向を洞察し、関連書籍を予め輸入し紹介に努めたこと。
 - 二、購買者の選択の便を計り新刊書を店頭に陳列し、自由に読書せしめたこと。
 - 三、「学鑑」の新書目録欄で、新刊書の内容を紹介し予約販売を行ったこと。
 - 四、注文を受けた場合は逸早く発行所と連絡をとり、その要望に応じたこと。
 - 五、このため書籍目録・顧客住所録・在庫品カードを整備したこと。——等
- ここに挙げた五項目はそれぞれ業者が遵守すべき心得であるが、特に第五項は是非とも、準備して置かなければ

G C S		English Language		.50	
III-A		Lloyd,		NEO	
		Correlative English			
B. Herder Bk. Co		'36		6.00	
				停	
G	I	MB	U	M	W
TH	S	P	O	B	K
N	E	J			

「スリップ」の見本

ならないものである。今日和書の新刊書には通称「舌^{した}」（スリップ）と呼ばれる書籍カードが挟み込まれているが、これは必要が生んだ丸善店員の発明であった。

即ち書籍の仕入では洋書並に和書を問わず、ストックと見合わせて注文をしなれば、超過ストックをつくる危険があり、若しこの結果資本を寝かせるようなことになっては、それこそ営業上最もきびしい禁律をおかすことになるから、経営責任者の生命を犯すと言っても過言ではなからう。そこでこれを制御する最上の方法として採られるのが所謂ストックブックによる調査である。然らばこのストックブックシステム (Stock Book System) とはどんなものであろうか。今その仕組を語る前に、簡単な歴史を述べておこう。

元来洋書の新刊注文の選定は、外国の新刊総合目録（週報・月報等）と、出版社の予告刷物 (circular) によってなされた。その選定は特定の数人がこれに当り、大正初年から昭和初年までは、主として荒川実書籍部長、田中二郎洋書店主任、中山良謙洋書仕入課長、山崎民雄ストック (商品) 課長が担当していた。その他、年に二回程トラベラーと称するセールスマンが外国の出版元数社を代表して来日し、東見本^{あきほん}や内容見本を示して注文を取っていた。これらの方法によって入荷した洋書の中、好学者の希望に応じ切れず何がしかの不足品が出るのも止むを得ないが、そ

うした補充品を調査するために考案されたのがスリップ (slip) であった。出来たのは大体明治末年か大正初年ごろで、発案者は当時ストック係をしていた斎藤哲郎だったという。彼の「思い出話」によると、次の通りである。

わたしは入社後二年位で洋書目録編集の手伝いをさせられるようになった。ところが当時は万事小規模の時代であったから、商品管理も組織的にはできていなかった。在庫品台帳などは上級番頭さんの頭の中に漠然と存在するだけであった。だから頭の中に台帳のないわたしなどには、目録の編集は至難の仕事であった。そこでわたしは形にあらわれた台帳、それを見ればだれにも直ぐいろいろわかる台帳の作製を進言した。しかしそんな面倒なものは、というわけでその進言は却下されてしまった。けれどもそれではわたしの勤めは果されない。そこでわたしは目録係の立場から、今日のストックブックの原始的なものをかなりの日数をかけて作り上げてしまった。現在、日本の出版界だけに独自に用いられているあのスリップは、この時考案されたスリップにその源を発している。もっともこのスリップが出版界の注目を集めるようになったのは、あの舌が考案されてからで、舌が考案されるまでにはかなりの年月がたっていた。またストックブックの様式が一応ととのうのにも相当の年月が費いやされた。しかし調ったといってもやはり原始的なもので、それが現在の完成した形にまで発達したのは、新進諸君の力によるものである。

ところで、最初の頃のスリップは本の上下に折り込む程の大きなもので、現行のスリップが使用された大正四、五年以後でも未だ用いられていた。さて、このスリップの効用と云えば、まず入荷年月日・部数等をこれに併記して店頭に出陳し、売却の場合はこのスリップを引き抜いて、一日に二、三回まとめて整理し、これを店頭からスト

ック係に回付すると、これを受けた係は、スリップによって販売数を知り、補充注文をした。然しこれだけでは未だ的確に在庫数がつかめない欠点があったから、そこで案出されたのが、ストックの台帳、丸善ではこれを一般にストックブックと呼んでいたものであった。この台帳の単位は、洋書一点一葉のストックリーフ (Stock Leaf) で、それぞれの分類によって仕分けられていた。例えば、

Religion, Theology, Philosophy, Education, Sociology, Political Science, Law, Economics, Commerce,
Language (English, German, French, Russian, Italian, Spanish & Portuguese)……

である。尤もこの分類は大正五年以降十二年ごろまでに制定されたものであるが、いまま顧客に配布されている新刊洋書目録 (Maruzen Announcement of New Books) には、大体この分類方式を踏襲している。

このリーフの特長は、図書館的な記録のほかに、商取引に必要な事項、例えば送料・原価・売価・入荷年月日等も記入され、更に、赤インキで何時何部外注されたかも書込まれ、着荷の時には、それが改版か否か、製本は前と同様か、そして代価は如何など詳細に現品に当って記入する。またいずれの営業所に何部出たか、店頭は何冊出たか、そして結局何部残っているか等が一目で判るようになってゐる。因に本店以外の支店・出張所への出荷には、凡てスリップをつけず、所謂売渡し扱いにした。以上で略々わかる通り、リーフは図書館に於ける図書カードと殆んど同じ効用を生んだが、唯異なるところは絶版または販売に不適当と判断されたものには、当然リーフをつけることをしなかった。ところでこのように営業上不可欠の基礎的資料ともなったストックリーフも、関東大震災によって中絶した為、急遽再調製をいそぎ、大正十二年末から翌年にかけて略旧態に復し、その後の加除もあって昭

和十年頃これが完成を見た。昭和十八年頃には、その数凡そ二〇万枚のストックリーフが、ストックブックに分類収容され、洋書目録の原資料として珍重されるにいたった。

三 顧客本位

かくして一応営業上の体制は整ったが、何んと云っても顧客があつてこそ商売が成り立つのであるから、その動向を正確に把握し、顧客の要望に應えるための措置を採る必要があつた。そこで案出されたのが、カスタマインデックス (Customer Index) の作成であつた。この創案者は一般に山崎民雄と云われているが、昭和七年ごろから次の要項を定めて作成準備に入つた。

一、書籍類特に洋書の顧客は、団体・個人の如何を問わず出来るだけその全部を網羅し、購入書の主題別に分類して記録すること。

二、本支店・出張所等各営業所に、それぞれ子カードと称する詳細なカードを常備し、更に審査課には全営業所の顧客数をまとめた親カードと称する総合カードを備える。

三、新十進分類表を作製し、これに基づいて顧客を分類する。

四、審査課にカスタマインデックス整備係を設け、将来常置カードの分類・訂正・加除等を行わしめる。

以上はその大要であるが、さてこれを実行に移すとなると大変な作業で、例えばその第二項を取り上げて見ても一朝一夕になし終える仕事ではなかつた。しかも各顧客の要求を満すためには、その研究課題を更に細分整理する

必要があり、全營業部門の総力を結集しても長い年月を掛けなければ、完全な体勢を整えることは不可能であった。しかし幸いにして丸善には、この方面にかけてのベテランが数多おり、その永年の経験と勘によって、一年有余の短期間で、見事に初期の企画を達成し、翌八年三月に分類表の索引を完成して、これを実施することが出来た。ところでこゝに云う丸善独特の新十進分類表について一言しておこう。明治末期ごろまでの洋書分類表は、主として欧米の資料を基礎にし、これに随時増減訂正を加え、自然発生的に丸善独特のものをつくり出した。しかしカストマーインデックス用としては、尚且つ粗略に過ぎて、実用向きではなかった。そこで考え出されたのが新分類表で、デュイ (J. Dewey) の十進法を軸とし、これに実用的な要素を加味してつくり出されたものである。すなわち

I、IX のグループを基本とする G

A、アルファベットによるクラス C

1、アラビア数字によるセクション S

に分類した。この分類法は大嶽岩太郎が主として作製したものと云われ、これによるとグループ以外、新学説などの項目を無限に拡張される利点があった。

こうして創設されたカストマーインデックスは、親カードの項目によって、全国に何人の顧客が有るのか、その希望する書籍はどういうものかなどの実態を中央で知ることが出来、更にこれによって、広告・宣伝等を狙い打ちに行い、冗費を節約出来るといふ余沢さえ生じた。

顧客及びその風格に就いては後述するが、ここでは一つのエピソードを挿入しておこう。それは大正初期の文芸復興に連れて、文学者の来訪が盛んになった時、社会主義者や無政府主義者の顔も多くなった。安部磯雄、山川均、荒畑寒村、大山郁夫、大杉栄等もよく来店し、元社員中村春太郎の話によると、大杉栄は必ず伊藤野枝を伴っていたと云う。瀬戸内晴美の小説「鬼の栖^{すま}」には、当時二人は本郷菊坂の「菊富士ホテル」に愛の巢を築いていたと記しているが、その菊坂から一週一回位は来店した。大杉達の案内役は中村が担当していて、或る時買い上げ品を「お届けいたしましたか」とたずねたところ、「いいや、外に供^{そと}が待たしてあるからそれに渡してくれ給え」と言う。店頭を見廻した処それらしい姿もないので、「どちらさんでしょうか」と再びたずねたところ、街頭を指さし「あの男だよ、アレなら確実に家まで届けて呉れるから」と云う。指さした場所は丁度店の筋向い、砂場（蕎麦屋、当時丸善の向いにあった）の角に身を潜めた鳥打帽姿の男がこちらを窺っている。一見して刑事とわかったので「先生御戯談でしょう」と真顔で言う、大杉は声を立てて笑ったと云う。「あれが有名な社会主義者とはどうしても思えません。それにしてもあのような悲惨な最期を遂げられて本当にお気の毒でした。」としみじみ述懐していた。